イスラームと自然

自然、動物とのかかわり方

この世の生きとし生けるものは、お互いを成り立たせているかけがえのない存在であり、それぞれが世界の大きな流れを支える唯一無二の「一」でありながら、個々の存在は想像もつかない大きな「全」でもある。

あなたがたは思い起こさないのか。

アッラーは天地にあるすべてのものを、あなたがたの用のために供させ、また外面と内面の恩恵を果たされたではないか。(クルアーン31:20)

人間は、様々な動植物からその恩恵を受け取っているが、それは決して自然や動物を所有しているわけではない。塵芥から天体に至るまで、凡てのものの主はアッラー唯独りである(クルアーン37:5)。そして、アッラ

ーは人に信託として託されたすべての被造物の権利を守るように命じた(クルアーン33:72)。

したがって、人間は自分たちが住んでいるこの自然に対して責任がある。イスラームによれば、身の回りにあるものをただの消費物としてみなすことは大きな過ちである。この世のあらゆる被造物はそれぞれがお互いの恵みを分かち合うために創造されたのであり、個々の存在はそれぞれにかけがえのない価値とこの世に生まれてきた意味がある。

もし人間が周りとの関係のなかで神の定めた規範と道徳律に従わなければ、世界の調和は乱れていく。聖クルアーンは、このような状況を次のように述べている。

人間の手が稼いだことのために、陸に海に荒廃がもう現れている。

これはアッラーが、人間たちの行ったことの結果を味わわせ、彼らを悪から戻らせるためである。クルアーン30：41

聖典クルアーンと預言者ムハンマドの言行は、自然を構成する山川草木や動物たちとどのように接するべきかについてあるべき規範と模範を示している。たとえば預言者ムハンマドは皆が使うべき水源や道路、休むための日陰を誰かが占有することを禁じた。（アブー・ダーウード、清浄、14）特に水の無駄遣いを戒めた。ある日、川で礼拝のための清めをしていた教友を預言者ムハンマドが見て、「なんという無駄遣いか」とたしなめた。「礼拝のための清めのためであって

も無駄遣いとなるのですか」と教友が問うと、預言者ムハンマドは「左様、豊かに流れる川の水であっても無駄遣いとなる」と答えた。（イブン・マージャ、清浄、48）

イスラームは自然の恵みの占有や浪費を防ぎ、資源を意識をもって大切に扱うことを説いている。干ばつや温暖化、水資源の枯渇、空気汚染のような環境問題が深刻となっている今日において、我々はイスラームの理念に耳を傾ける必要がある。

預言者ムハンマドは、自然に生きる動物たちの生きる権利を守るため、彼らが生きるために必要不可欠な森林の尊さについて次のように言われた。

もしあなたたちの手元に苗があるなら、最後の審判が訪れるその時でさえその苗を大地に植えなさい。（イブン・ハンバル、III、184）

ムスリムが木を植え、やがてその木に実った果実を人や動物が食べたならば、それは木を植えたものの貴い寄進（サダカ）として記憶されるだろう。（ブハーリー、作法、27）

イスラームでは人はこの大地に対して責任を負っており、預言者ムハンマドは荒廃した大地を蘇らせ、種を植え、再び動植物が恵みに預かれるようにすることを説いた。「あなたが持つ土地があるならそこに種を植えなさい。自分ができないなら、同胞に種を

植えることを勧めなさい。」(ブハーリー、農耕、18)

ムスリムは、もっとも小さきものから最も大きなものまで、あらゆる動植物が神の被造物として貴い価値があり、そして人間に委ねられた信託であるという事実を常に胸に留めて生きている。慈悲の示し手たる預言者ムハンマドはまず第一に、避難所の確保、清潔さ、栄養、病気予防からの観点から動物の権利を意識することを説いている。騎乗用の動物を無理やり使役することを許可せず、羊の囲いを清潔に保つように命じ、動物が怪我をすれば治療をするように言った。

動物虐待はイスラームの道徳的価値観に反する行為である。それは、預言者ムハンマドが生涯において決して行わなかった人道的罪である。預言者ムハンマドは、理由もなく殺されたスズメでさえ、最後の審判の日には峻厳にして優美なるアッラーの前に立ち、人間に対する原告になると述べています(ナサーイー、犠牲、42)。「動物を拷問してはならない」という明確な預言者の命令も存在する(ムスリム、ジハード、32)。預言者ムハンマドは、人間に害を及ぼさない野犬を殺すことや(イブン・マージャ、狩猟、2)、動物を遊びのために戦わせたり、的として使用し撃ちことすことを禁じている(ムスリム、屠殺、58;　アブー・ダーウード、ジハード、51)。

預言者ムハンマドは、喉の渇きで地面をなめている犬に水を与えるために、砂漠の井戸に降りて靴を水で満たした男性の話を伝えている。この行いのために、アッラーはその男に満足し、彼に恵みを与えたとされる(ブハーリー、分益小作、9)。

預言者ムハンマドが語った別の出来事は、猫に腹を立て、家に閉じ込められ、空腹で死なせた女性の話がある。この女性は猫に対する仕打ちによってアッラーの懲罰を火獄で受けることとなった。(ムスリム、挨拶、152)。犬に水を与える人は、動物の権利を尊重したことで報われる。猫を投獄した女性は、動物の権利を奪ったことで罰せられた。人間は自身だけではなく、この地上にい

きるあらゆる動植物が生きる権利を認めなければならない。

ある時預言者ムハンマドは空腹のために胃が背中に張り付いてしまいそうなほどやせ細ったラクダに出会い、次のように言われた。「この人間の言葉を離さない動物をこのような境遇においてしまっていることについて我々は神の裁きを畏れなければならない！このラクダをよく世話し、食べ物や飲み物を与えなさい。」（アブー・ダーウード、ジハード、44）

ある遠征中に、教友が二羽のひな鳥を見つけ、そのうち一羽を捕まえて連れてきた。預言者ムハンマドは、母鳥が地面に低く飛んでひな鳥を探しているのを見つけ「誰が母

鳥の子供を連れ去り、悲しませているのだ?」と言った。そして「母鳥に赤ちゃんを返しなさい!」と教友たちに命じた。(アブー・ダーウード、ジハード、113)。また預言者ムハンマドは別の遠征でメッカの征服に向かう途中で、道で雌犬が子犬を抱きしめ看護しているのを見ました。彼は教友に犬のそばに立つように命じ、誰も母犬とその子犬に触れてはならないと言った。(ワーキディー、II、804)。

預言者ムハンマドは、動物に対する暴力を承認せず、言葉で傷つけることも赦さなかった。乗っているラクダを罵った女性をラクダ

の背から降ろし、ラクダを解放することを命じたほどである（ムスリム、敬虔さ、80）。

イスラームは、人々にこの世に生きとし生ける全ての生命に対する思いやりと善良さに基づいた関係を築くことを望んでおり、自然が作り出した壮大なバランスを守り、維持することに努めるよう人々に勧めている。イスラームにおける最後の預言者ムハンマドの言葉に次のようなものがある。

「アッラーは慈悲深い人々に対して彼の慈悲を示す。地上に生きる人々に慈悲を示してください。そうすれば、天国の者たちもあなたに慈悲を示すでしょう」（ティルミズィー、敬虔さ、16）。植物や動物の生きる場である

自然界のバランスを維持することは人間の義務である。イスラームによれば、この自然のバランスを崩し、大地に生きる一員として、自然を損なうような行動は強く戒めされている（クルアーン7章56節）。

連絡先
宗務庁
宗教出版本部

Diyanet İşleri Başkanlığı
Dini Yayınlar Genel Müdürlüğü
Yabancı Dil ve Lehçelerde Yayınlar Daire Başkanlığı

Üniversiteler Mah. Dumlupınar Bulvarı
No:147/A 06800 Çankaya-ANKARA/TÜRKİYE
Tel : +90 312 295 72 81
Fax : +90 312 284 72 88
e-mail: yabancidiller@diyanet.gov.tr

İSLAM VE ÇEVRE
JAPONCA